

飼料用米の収穫・乾燥と次年度の漏生イネ対策について

茨城県・茨城県農業再生協議会

以下の点に留意し、適切な飼料用米生産を行うとともに、コスト低減にも努めましょう。また、次年度に多収性専用品種から主食用品種に切り替える圃場では、異品種混入を防止するため、漏生イネ対策を徹底してください。

1. 収穫作業

- 主食用栽培と比べて生育が旺盛でコンバインへの負担が大きくなります（特に多収性専用品種）。走行速度を控えたり、刈り取り条数を減らしたりするなど、生育量に合わせて収穫作業を行いましょう。
- 収穫適期は、穂首近くに緑色を残した籾が穂全体の10%程度になった頃以降です。**可能な限り立毛乾燥を行ってから収穫**しましょう。籾や茎葉の水分を低下させてから収穫することで、コンバインにかかる負荷を軽減でき、乾燥コストも削減できます。
- 立毛乾燥による籾水分の低下は、その年の気温や降雨にも左右されますが、籾水分18%程度を目標とした目安は**表1**のとおりです。ただし、実施に当たっては、**脱粒性や穂発芽性などの品種特性に注意**が必要です（特に多収性専用品種）。脱粒性が高いと、収量低下とともに漏生による異品種混入の原因となります。また、穂発芽が生じると飼料としての品質に問題が生じます。

表1 立毛乾燥(籾水分18%程度)に必要な登熟日数

< 出穂期後の積算気温1300 を基準とした推定 >

地域	出穂期(全穂の4~5割が出穂した時期)			
	8月上旬	8月中旬	8月下旬	
県北	沿岸部	60日	60~65日	70日
	山間部	60日	65~70日	75日(注)
県央		55~60日	60~65日	70日
鹿行	北部	55~60日	60~65日	70日
	南部	55日	60日	65~70日
県南・県西		55日	60日	65~70日

(注)8月第5半旬までの出穂、それ以降の目標水分到達は困難。

2. 乾燥作業

- 乾燥方法は主食用に準じますが、食味や外観品質を考慮しなくて良いので、温度設定をやや高めにし、乾燥効率を上げることも可能です（契約先の品質規格に注意してください）。
- 保存性を高めるため、**仕上げの玄米水分は15%以下**とします。高温乾燥した場合には、乾燥終了後の穀粒水分の戻りに注意しましょう。

表2 落下種子対策の耕起判断

地域	耕起晩限	
県北	沿岸部	10月第3~第4半旬
	山間部	10月第1半旬
県央		10月第2~第3半旬
鹿行	北部	10月第3半旬
	南部	10月第5半旬
県南		10月第3~第4半旬
県西		10月第4半旬

(注) 耕起晩限は、出芽に必要な有効積算温度100・日(日平均気温の下限值10・)が得られる限界時期

3. 漏生対策

収穫後に適度な水分と温度条件が確保できる場合には、**収穫後は速やかに耕起**し、落下籾の土中出芽を促進させます。

収穫期が遅く、出芽温度が確保できない場合には、**未耕起**で籾を表層に残し、鳥による捕食と寒さで越冬率を減少させます。・の判断基準は**表2**のとおりです。

- 翌年は可能な範囲で**移植時期を遅らせ、代かきを浅水で丁寧**に行います。さらに、**漏生イネに効果的な除草剤の体系処理**を行います（なお、「モミロマン」などトリケトン系除草剤成分に感受性品種の場合は、これらを含む除草剤を使用します）。